

フェミニズムを超えて

統一思想研究院 大谷明史

フェミニズムの先駆となったのはフランス革命であり、その代表的人物は革命議会で活躍したコンドルセ (Condorcet)、議会外で活動し『女性および女性市民の権利宣言』を発表したオランプ・ドゥ・グージュ (Olympe de Gouges)、およびフランス革命に影響を受けたイギリスのメアリー・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft) であった。

19 世紀前半の英米で第一波フェミニズムと呼ばれる女性運動が起きた。慈善運動、教育における男女平等の要求から参政権の要求へと向かった。さらにアメリカでは奴隷制廃止運動、イギリスでは廃娼運動があった。

第二波フェミニズムはシモーヌ・ド・ボーヴォワール (Simone de Beauvoir) の『第二の性』がその先駆であった。その中で彼女は、「ひとは女に生まれぬ。女になる」という有名な宣言を行った。アメリカ合衆国における第二波フェミニズム運動は 1960 年代後半に始った。

ベティ・フリーダン (Betty Friedan) は女性差別の撤廃とあらゆる分野への女性の参画をめざし、1966 年に NOW (全米女性機構) を設立した。ジュリエット・ミッチェル (Juliet Mitchell) は『女性—最も長い革命』を発表し、マルクスの弁証法的唯物論と、フロイトの精神分析を女性解放に活用すべきであると主張した。

シュラミス・ファイアストーン (Shulamith Firestone) は『性の弁証法』を発表し、「現在の閉鎖的な結婚・家族制度を解体し、一人暮らしと共同生活、異性愛と同性愛と多型的倒錯など、任意のライフスタイルを選べるようになるだろう」と語った。

NOW から袂を分かったレズビアンたちによってレズビアン・フェミニズムが展開された。その主張は、女性抑圧の根源はセクシュアリティの支配、特にヘテロセクシュアリティ (異性愛) の強要であるから、この制度を崩壊させなければ、女の解放はありえない、というものであった。

フランスでは 1970 年に女性解放運動 MLF が誕生したが、その後、二派に分裂した。一方はボーヴォワールの後継者たちによる「フェミニスト革命派」(平等主義・普遍主義) であり、デルフィ (Christine Delphy)、ウィティッグ (Monique Wittig) がその代表であった。この派は、女とは社会的に構築されたものであり、男女二元論の異性愛の枠組で語られたものと主張し、生物学に基礎をおくジェンダー差異に反対した。

他方はプシケポ (差異主義) であり、フーク (Fouque Antoinette)、クリステヴァ (Julia Kristeva)、シクスー (Hélène Cixous)、イリガライ (Luce Irigaray) などが

その代表であった。彼女たちはフロイト、ラカン、デリダの精神分析、脱構築の理論に依拠し、女性解放の目的は、女性が男性と同じになることではなく、女性、男性という別々のアイデンティティを互いに認めることだと主張した。この派がポストモダン・フェミニズムであった。彼女たちの理論は1980年にアメリカに紹介されて、大きな衝撃を与えることになった。

第二波フェミニズムに続いてポストフェミニズム（ポストモダン・フェミニズムを含む）が生まれた。ポストフェミニズムは、フェミニズムの成熟、新フェミニズム、脱政治化、個人のエンパワメントなどと性格づけられる。

日本においては、主として急進的なフェミニスト達によって、ジェンダー（社会的に認められている性差）からの自由を目指す思想や運動に「ジェンダーフリー」という言葉が使われるようになった。そして今、「ジェンダーフリー」は社会的に深刻な影響を及ぼしているのである。

以下、ポスト構造主義がフェミニズムに及ぼした影響について論じた後に、今日のフェミニズム思想とゲイ/レズビアン・スタディーズの中核となっているポストモダン・フェミニズムとクィア理論について、統一思想の観点から批判、検討していくことにする。

（1）ポスト構造主義とフェミニズム

イギリスのケント大学でウィメンズ・スタディーズを担当する教授であるメアリ・エヴァンス（Mary Evans）はポストモダン思想（ポスト構造主義）がフェミニズム思想家に大きな役割を与えたと次のように言う。

ポストモダン思想は19世紀の大統合理論を批判し、その代わりに（フーコーにならって）20世紀後半における生を説明する方法は、部分的に重なり合う一連の言説やアイデンティティに参加することを通してなされるべきだと提議した。社会的、感覚的世界に対するこのアプローチは、ジェンダーやセックスのアイデンティティの違いを認め、多面的な女性の生き方に理論的な場所を与えるという意味で、多くのフェミニストに完全に理解された⁽¹⁾。

デリダによれば、言語はたえずかき乱されているのであるから、性のアイデンティティーもかき乱されているのである。フーコーによれば、性は権力による規制を受けたものであって、本質的な性のアイデンティティーはありえない。そしてラカンによれば、性は言語によってつくられたものであり、本来、性的関係などはなく、女というものは存在しないとまで言う。

このようなポスト構造主義がフェミニズムの思想的なバックグラウンドとなった。特にフランス・フェミニズムがアメリカをはじめ、世界に大きな衝撃を与えることに

なった。その中心となったフェミニスト思想家は、ジュリア・クリステヴァ、リュス・イリガライ、エレーヌ・シクスーであった。

すでに述べたように、ポスト構造主義はマルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義を土台として成立したものであった。そしてポストモダン・フェミニズムはさらにポスト構造主義を土台にして成立しているのである。したがって、マルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義が間違いであることが明らかにされれば、ポスト構造主義も、ポストモダン・フェミニズムも崩れざるをえないのである。ポストモダン・フェミニズムとその土台となっている思想を図 5-1 に示す。



図 5-1 ポストモダン・フェミニズムとその土台
となっている思想

①フーコーとフェミニズム

フェミニズムはフーコーの著作から大きな影響を受けている。メアリー・エヴァンスは次のように言う。

フーコーの思想が人びとに特権を与え、人びとを解放する力を持っているのは、表現がある意味で人間のリアリティに関する「真実」を「暴露する」のではなく、さまざまな人間の状況と社会的文脈のなかで「真実」についての解釈をつくり出すものであることを伝えている。このように言うことで消えるのは、「正常」もしくは「真の」セクシュアリティという考え方である。フーコーによれば、セクシュアリティは構築物そのもの、しかも変化する構築物である^②。

フーコーは、性に関する言説には権力の操作が隠されているという。英国の評論家のソフィア・フォカ (Sophia Phoca) によれば：

権力は、性の抑圧をとおしてではなく、むしろ「異常な」セクシュアリティや「正常な」セクシュアリティの概念をおびたたく生み出す「オープン」な論議や分析

をとおして作用する。性の科学的言説は、19世紀に生み出され、それをフーコーはセクシュアリティの学と呼んだ。問題なのは、性ではなくて、科学的言説それ自体に内在している権力の力学である。……セクシュアリティの学は、人間主体を分類し規制するもう一つの方法であり、健康で正しいセックス・ライフという「自由主義的」言説になったときに完成する⁽³⁾。

フーコーの思想は同性愛のみならず、フェミニズムにとっても有効なものであった。

②デリダとフェミニズム

ポストフェミニズムはデリダの言語的攪乱の戦略を得ているとソフィア・フォカは言う。

“ポスト”フェミニズムは、デリダの言語的攪乱の戦略から多くを得た。「語りえない差延」という彼の概念は、抑圧され、権利を剥奪された女の状況に応用しうる。女の状況は自然なものではなく、構築されたもので、それを顕在化しうるのは「男根ロゴス中心主義」への脱構築的批評によってである⁽⁴⁾。

さらにデリダの脱構築は、「原理主義的な家父長制の二分法がどのようなものか——たとえば男女の二分法が男を特権化していること——を明らかにし、それを脱臼させる新しい可能性をフェミニズムに提供した」のである⁽⁵⁾。

③精神分析とフェミニズム

メアリ・エヴァンスによれば、「ジュリエット・ミッチェルの『精神分析とフェミニズム』はフェミニズムにフロイトを再発見させることになり、フェミニズムが象徴と感情の世界の理解に接近することを可能にした」⁽⁶⁾のであり、フロイトの無意識の理論と、後天的に習得される性的アイデンティティの理論がフェミニズムにとって有効な理論的根拠をもたらすようになったと言う。

彼〔フロイト〕の無意識の理論と後天的に習得される性的アイデンティティの理論は社会における比喩的なものや、性的アイデンティティが習得されるプロセスのダイナミックを論じることを可能にする。重要なのは、精神分析が西洋の社会科学が提供する固定的な性役割についての分析から抜け出す道を提供したように思われることである。したがって、フロイトの再読から生まれたのは、女性を「記号」として論じたり、個人の経験よりも一般的なパターンという視点から文脈を読むことであった⁽⁷⁾。

メアリ・エヴァンスによれば、「1970年代にフェミニズムが精神分析を再発見したとき、精神分析は言葉で表現されたものだけでなく社会的生活や知的生活のなかにある比喩的なものや象徴的なものを解明できる枠組みを女性に与えた」⁽⁸⁾のであり、「精神分析に親しむことは70年代以降アカデミック・フェミニズムの必要条件となった」⁽⁹⁾のである。

④ラカンとフェミニズム

フロイトの精神分析に次いでフェミニズムに影響を与えたのはラカンであった。メアリ・エヴァンスは次のように言う。

しかし、このようなフェミニズムの視点から見た精神分析の著作はフロイトで終わらなかった。……女流作家が言語と表現を概念化する方法を開発するときに、とくに重要なのはジャック・ラカンである。……ラカンの男根の理論を普遍的な意味体系として、父親の法則を文字通り表現するものとして、欲望のもっとも重要な意味体系として強調することだった⁽¹⁰⁾。

ラカンによれば男根（ファルス）は言語と文化をつくる能動的な力である。男根は父の法や去勢不安を意味する。ラカンにおいて、言語において構造化されている領域を象徴界と呼び、象徴界によって追放される混沌たる領域を現実界とみなした。そして女性性を現実界の混沌に関与する位置（「ファルスである」位置）に、男性性を現実界を封印する象徴界の言語を所有する位置（「ファルスをもつ」位置）に設定したのである。

現実の象徴界は男根的価値を中心とした言語が支配している。そして男根は価値観をもち、その権力を利用する存在を「男性」、そこから脱落しているか、不在か、消去されている存在が「女性」と見なされてきた。それゆえフランス・フェミニズムは、父なる象徴秩序としての言語の解体に、果敢に取り組んだのである。

(2) マルクス主義フェミニズムとラディカルフェミニズム

①マルクス主義フェミニズム

メアリ・エヴァンスが「フェミニズムはマルクスを発見し、フーコーとともに成長したように、フロイトを再発見した」⁽¹¹⁾と言っているように、フェミニズムは第一義的にマルクス主義の影響を受けているのである。

エンゲルスによれば、「婚姻関係では女性がプロレタリアートで、男性がブルジョワジーである」。したがって異性愛の関係に入ることは、男性による女性に対する不可避の搾取をもたらすというのである。

マルクス主義によれば、このような支配・被支配の構造が生じたのは生産力の増大

によるものである。原始の母系制共産社会において性差別はなかった。しかし、生産力の増大により富の分配に不公平が生じ、私有財産が発生するに及んで、女性の世界的敗北として母系制の崩壊が起こり、父権制が確立することで、女性の家内奴隷化が始まったというのである。

マルクス主義フェミニズムを代表するのがクリスティーヌ・デルフィである。マルクス主義フェミニズムによれば、「女性性と男性性の神話が先に存在して、それによって近代の家父長制が作りだされたのではなく、資本制を保持するための中産階級的な家父長制が……このような神話を捏造し、それを自然化、普遍化していった」⁽¹²⁾というのである。

そして当然ながら、マルクス主義フェミニズムは「資本主義は女性搾取から利益を得ているとみなして、資本主義搾取体制との闘争を宣言した」⁽¹⁴⁾のであった。

②ラディカル・フェミニズム

ラディカル・フェミニズムは60年代後半のアメリカ合衆国に登場した、女性の抑圧を階級抑圧を含めたあらゆる抑圧構造の根源に位置づける運動であった。男による女性抑圧は他のすべての抑圧の根源であるとみなし、性による区別化（差別化）であるジェンダーを終わらせればすべての抑圧はなくなるというのである。

マルクス主義フェミニズムとラディカル・フェミニズムの違いは、産業資本主義と男性支配型の家父長制家族のうち、どちらが先に誕生したか、あるいはどちらを重視すべきか、ということである。ラディカル・フェミニズムによれば、家父長制支配は歴史の中で生じたものであるが、マルクス主義フェミニズムは近代資本主義の成立とともに家族がジェンダー化したと見るのである。

ラディカル・フェミニズムに理論的に貢献した代表的フェミニストはベティ・フリーダン、ケイト・ミレット、シェラミス・ファイアストーン、ジュリエット・ミッチェルなどである。

(3) ポストモダン・フェミニズム

ポストモダン・フェミニズムとは現代フランス・フェミニズムのことであり、それを代表するのがクリステヴァ、イリガライ、シクスーである。

①ポストモダン・フェミニズムの論調

(i) クリステヴァ

ソフィア・フォカはジュリア・クリステヴァ (Julia Kristeva) の思想を次のように説明している。

クリステヴァは、ラカンの想像界と象徴界の関係を、彼女自身の言葉、原記号界

と象徴界の關係に置き換えて、概念化し直した。……原記号界は、母に深く結びついた幼児の初期のリビドー的衝動、つまり前エディプス期の原初的衝動に結びついていると述べる。……クリステヴァは、コーラというギリシャ語（プラトンの『ティマイオス』に出てくる言葉）を使って、原記号界の「不気味なもの」を説明する。それは、名づける「形式」に先立つ、名づけえない混沌とした「子宮のような」空間である。クリステヴァにとってコーラとは、母子が共有する身体空間であり、表象に抵抗し、欲望として体験されるものである。母性的コーラは、意味作用の基底にあり、それに先行している。またその秩序を不安的化させる危険性を持つ⁽¹³⁾。

ソフィア・フォカはさらに、「クリステヴァの原記号界は前言説的・前言語的で、リズム・トーン・色など、前表象的なものすべてに関わっている。クリステヴァにとって、原記号界は芸術では‘表象＝再現前できない’ものだが、芸術のなかに、そして詩的言語においても、現前している」という⁽¹⁴⁾。

原記号界は家父長的な象徴秩序に対しては、攪乱的で創造的な力をもつものであり、閉鎖を破り、象徴界を粉碎するものである。ジュディス・バトラーが言うように、クリステヴァは原記号界を持ちだして、象徴界における「父の法」（規範）を攪乱し、破壊しようとした。そして「父の法」のかなたにある快樂——詩的言語や母性の快樂——を目指したのである⁽¹⁵⁾。クリステヴァのいう、前エディプス期における母子関係とは、母と一体化した近親相姦的な快樂の空間であった。

(ii) イリガライ

リュス・イリガライ (Luce Irigaray) は、「精神分析は家父長的、男根中心的で母や女のセクシュアリティを十分に認識してこなかった」とフロイトの精神分析を批判した。そしてイリガライは、家父長制を脱構築するためには、文化を女の側から読み直すことが必要であると述べ、ユートピア的なポスト家父長的未来に希望を託したのであった。デリダの脱構築を使って、古今の主要哲学書が「男性的想像力」で書かれていることを跡づけ、「とくに女の側から、哲学的伝統を問い直そう」と主張した。イリガライは、父なるものと同等の地位を母なるものに与えることで、性的差異を認識できる未来を概念的に構想した。そのためには、女は前エディプス期の想像界——言語のまえにある前＝家父長的世界——に戻るべきであると主張した⁽¹⁶⁾。

イリガライによれば、女は「ひとつ」ではない「セックス」である。あまねく浸透している男性中心主義の言語——男根ロゴス中心主義の言語——の内部では、女は表象不能なものを構築する。換言すれば、女は思考できないセックス、つまり言語上の不在や不透明さを表象している。単声的な意味づけに安住する言語においては、女のセックスは抑制できないもの、名づけえないものを構築する。この意味で、女は「ひ

とつ」のセックスではなく、多数のセックスなのである⁽¹⁷⁾。

ラカンとデリダの影響を受けて、イリガライは、モニク・ウィティッグ、エレヌ・シクスーと共に、男根主義的言語を拒否し、女性の欲望の現実を反映できる言語——エクリチュール・フェミニン——をつくることを主張したのである。

近畿大学教授の大越愛子が述べているように、クリステヴァは男根的言語体系を攪乱し、裂け目を導入して、その中に母性的な原記号界を割りこませようとしたのであり、イリガライ、そして次に述べるシクスーは男根的言語体系の外に、独立した女性的言語体系を確立しようとしたのであった⁽¹⁸⁾。

(iii) シクスー

エレヌ・シクスー (Hélène Cixous) は男根中心的なエクリチュールを批判して、男根を無化したエクリチュール・フェミニンを提起した。ソフィア・フォカはシクスーの思想を次のように要約している。

エクリチュール・フェミニンは……「女性性を書き記したい」という欲望によって動機づけられ、1970年代半ばにフランスから始まった。エクリチュール・フェミニンは、これまで言語をもたなかったもの——家父長制文化によって抑圧されてきた女性性——を書き記す。……シクスーは、男女の二分法のなかの女の位置づけから抜け出す道——脱出——を模索した。シクスーにとって西洋の哲学言説は、二分法の言語的差異の産物として、女を作ってきた。……この二分法構造を不安定化させることによって、男根中心的主体の特権は切り崩される。……エクリチュール・フェミニンという彼女の概念は、デリダの差延の思想を取り入れたものだ⁽¹⁹⁾。

クリステヴァ、イリガライと同様、シクスーも精神分析、とくにラカンの影響を色濃く受けていた。ソフィア・フォカによれば、「シクスーは、母の身体のリズムや表現は子どものなかに刻まれて、大人になってもそのまま残っていると考えた。彼女は、ラカンの想像界——母／他者との前＝象徴的な結合領域——に特別の価値をおいた。……シクスーは、‘彼女自身の身体を書く’テキストのなかで、二分法の閉塞性を打破した。この無制限のテキストの悦びは、**ジュイサンス (快楽、jouissance)** と呼ばれる。この語はラカンによって作られ、それに相当する的確な英語はないが、その意味は、性的オーガズムから導き出される究極の快楽である」⁽²⁰⁾。

テキストの快楽は、理論化も、封じ込めも、コード化もしえない女のエロティシズムのようなものである。シクスーは女性の快楽 (feminine jouissance) を目指したのであった。

②統一思想から見たポストフェミニズム

(i)クリステヴァ批判

クリステヴァは、父の法であるロゴス（論理、規範）が母性の快樂（ジュイサンス）を抑圧し、遮断していると見ており、法のかなたに始原的な快樂、父の法の拘束から自由である本物の身体（女の身体）があるという。これは封建的な道徳によって形づくられた超エゴが人間本性を抑圧しているというフロイトの主張に沿ったものである。

統一思想の観点から言えば、法（規範）のかなたに真の快樂があるのではない。法（規範）とは、真の愛を実現するための愛の道しるべである。法（規範）を逸脱した愛は真なる愛とはなりえないのである。

クリステヴァは、母と子の近親姦タブーは、象徴界において押しつけられたものであるというが、母と幼児の間の愛は、性的なものではなく、近親姦とは何の関係もない。したがって母と幼児の愛はいわゆる象徴界においても、禁止されるようなものでなく、一生を通じて不変なものである。

(ii)イリガライ批判

イリガライは男根主義的言語を拒否し、女性の欲望の現実を反映できる言語をつくることを主張した。そしてイリガライは家父長的男根体制を否定し、まったく異質な女性主体、多様な快樂に基づく女性主体のありようを明るみに出そうとした。

統一思想の観点から言えば、男性特有の快樂とか、男性特有のセクシュアリティと関係のない、独立した、女性特有の快樂とか、女性特有のセクシュアリティというのは無意味である。他方、女性特有の快樂、セクシュアリティと関係のない、独立した男性特有の快樂、セクシュアリティも無意味である。

男性特有の快樂、セクシュアリティも、女性特有の快樂、セクシュアリティも、男女が真の愛で愛し合うときに実現されるのであり、一方が他方と関係なく、独立的に実現できるものではないからである。

言語に関しても、今日までの文化が男性性中心の言語でつくられていたとしても、それに対抗して女性性中心の言語をつくり、女性性を中心とした文化を築くというのは誤りである。男女の性が調和した言語と文化が築かれるべきである。

(iii)シクスー批判

シクスーもクリステヴァ、イリガライと同様、女性特有の快樂を目指した。しかし真の快樂は女性だけでは得られない。男女の真の愛において、女性の快樂も男性の快樂も得られるのである。

シクスーはエクリチュール・フェミニンを確立しようとしたが、それは男根中心的言語と同様に、女性性を強調する一方的な言語である。男女性の調和した言語になら

なくてはならない。

(4) クィア理論

1990年代に登場したクィア理論は第三波フェミニズムやゲイ・レズビアンスタディーズとして知られる、ジェンダー・セクシュアリティの哲学的、理論的な研究から派生し、構築された理論であり、その代表的な思想家がジュディス・バトラー (Judith Butler)、イヴ・コゾフスキー・セジウィック (Eve Kosofsky Sedgwick) である。クィアは、あらゆる形態の性の規範化に反対するさいの用語とされ、性規範に関するあらゆる枠組みに疑問を投げかける。

①クィア理論の論調

(i) バトラー

アメリカにおいて、フランス・フェミニズムを批判的に受け入れながら自説を展開したのがジュディス・バトラーである。

バトラーは哲学上の二元論からくるところの、二元構造に基づく覇権的な文化の言説によってジェンダーの配置がまえもって仮定され、決められているとして、二元論、二分法に反対する。彼女によれば、カテゴリーは本質的に不完全なものであって、ジェンダーはパフォーマンスなものにすぎず、ジェンダー・アイデンティティは錯覚、幻影であり、存在しないのである⁽²¹⁾。バトラーは、男性の性に対抗して独立した女性の性を確立することにも異を唱えて、ジェンダーを攪乱しようとした。バトラーは『ジェンダー・トラブル』の中で次のように言う。

それゆえ本書は、男の覇権と異性愛権力を支えている自然化され物象化されたジェンダー概念を攪乱し置換する可能性をつうじて思考をすすめ、かなたにユートピア・ヴィジョンをえがく戦略によってではなく、アイデンティティの基盤的な幻想となることでジェンダーを現在の位置にとどめようとする社会構築されたカテゴリーを、まさに流動化させ、攪乱、混乱させ、増殖させることによって、ジェンダー・トラブルを起こしつづけていこうとするものである⁽²²⁾。

そして、レズビアンニズムの戦略はアイデンティティのカテゴリーを完全に奪い取り、異性愛制度は構築されたものであり、幻想であり、フェティッシュであることを示すことであると次のように言う。

それよりも狡猾で効果的な戦略は、アイデンティティのカテゴリーを完全に奪い取り、再配備することであり、それによって単に「セックス」を疑問に付すだけでなく、「アイデンティティ」の場所に多様なセックスの言説が集中している様子を明ら

かにし、そうして、アイデンティティというカテゴリーが——たとえどのような形態を取るにしても——永遠に問題がらみのものだというを示すことである⁽²³⁾。

ジェンダーとは、生物学的な性差であるセックスにたいして、文化的に構築された性差として、フェミニストによって使用されるようになった用語であるが、バトラーはジェンダーのみならず、セックスも社会的に構築されたものであると言う。

セックスの不変性に疑問を投げかけるとすれば、おそらく、「セックス」と呼ばれるこの構築物こそ、ジェンダーと同様に、社会的に構築されたものである。実際おそらくセックスは、つねにすでにジェンダーなのだ。そしてその結果として、セックスとジェンダーの区別は、結局、区別などではないということになる⁽²⁴⁾。

英文学者のサラ・サリー(Sara Salih)はバトラーの説を以下のように要約している。バトラーによれば、「言語に先行して存在するジェンダー・アイデンティティなどは存在しないということである。言ってみれば、アイデンティティが言説や言語を‘おこなう’のではなく、その逆——言語と言説こそがジェンダーを‘おこなう’——のである⁽²⁵⁾。すなわち、セックスもジェンダーも言説の結果である。これは「はじめに言説ありき」ということである。そしてバトラーは「行為者は行為に付けられた虚構でしかない——行為がすべてである」⁽²⁶⁾、「行為の背後に行為者は存在せず、‘おこなうこと’そのものがすべてなのだ」⁽²⁷⁾とも言う。これは「はじめに行為ありき」ということである。バトラーはさらに、法は文化によって押しつけられるものであり、そのような法によって男性気質や女性気質が生みだされると言う。

結局、バトラーは、「主体というカテゴリーと規範を揺るがし、法の限界を暴くことによって、法を空洞化させる再意味化の代案を提示」⁽²⁸⁾しようとしたのである。今日、フェミニズム理論やクィア理論へのバトラーの影響は決定的なものとなっている。

(ii) セジウィック

クィア理論の原動力とも、王母(Queen Mother)とも言われるセジウィックは「ホモソーシャル」なる概念を提示した。

ホモソーシャルとは、異性愛男性の友情・同胞愛によって支えられた連帯関係を指す。セジウィックによれば、古代ギリシアから近代に至るまで西洋はホモソーシャルな社会であったが、ホモソーシャルはホモセクシャル(同性愛)と断絶したものでなく、すなわち、連続したものであったという。ホモソーシャルな社会は潜在的に同性愛的であった。

セジウィックは「男性が異性愛関係をもつのは男同士の究極的な絆を結ぶためである」⁽²⁹⁾、「女性は、男同士の絆を維持するための溶媒」⁽³⁰⁾である。ホモソーシャルな社

会では、女性は男同士が絆を結ぶための手段になっているという。セジウィックは、レヴィ＝ストロースの「女性の交換」論—女性は、婚姻の相手としてではなく、男同士の絆をゆるぎないものにするために交換される物—をフェミニズムの視点から見たのである。

フーコーによれば、19世紀に「ホモセクシュアル」という近代のカテゴリーが生まれ、「ホモセクシュアル」が「一つの種族」になった。同性愛を異質化し、周縁に追いやる異性愛主義はそこから始まったと、セジウィックは見ている。

東京大学教授の大橋洋一が述べているように、ホモソーシャリティとは、異性愛男性の集合体であるが、そこにおいて男性の絆を切り裂きかねない女性（フェミニスト）と、男性集合体を女性から切り離して同性愛集団化しかねない同性愛男性は排除される。それゆえ、ホモソーシャリティはホモフォビア（同性愛者嫌悪）とミソジニー（女性嫌悪）に支えられた父権制のホモソーシャル社会なのである。この男性同士の連帯から同性愛者と女性一般を解放するために、ゲイ男性とフェミニストとの連帯が生まれる。かつては天敵であったゲイ男性とフェミニストが、ともにホモソーシャル的父権制社会の犠牲者であることに目覚めて連帯するというのであり、ここにクィア理論が成立したのである⁽³¹⁾。

セジウィックによれば、「性的欲望は、安定したアイデンティティを溶解させる、予想しがたい強力な溶剤」⁽³²⁾であり、同性愛と異性愛は揺れ動くものであって、セクシュアリティは混沌たるものであるという。

②統一思想から見たクィア理論

(i) バトラー批判

バトラーの主張は「はじめに言説ありき」ということであるが、主体は行為によって言説のなかで構築されると言って、言説の背後に主体を認めない。言説のなかで主体が生じるということである。しかし主体のない言説などありえるであろうか。バトラーはまた、行為の背後に行為者は存在せずと言うが、行為者のない行為などありえるであろうか。

ヨハネ福音書の冒頭に「はじめに言ありき」とあるが、それは神という主体がいて、言が発せられたのである。神という主体のない言はありえない。同様に、人間という主体なくして言説が存在するということはあるまい。虚空の中に言が存在しているというのであろうか。これは、すべては物質から生じたという「唯物論」ならぬ「唯言論」ともいべきものであろう。

統一思想から言えば、「はじめに愛ありき」、そして愛から言が生まれたのである。つまり、神は愛であり、愛から天地創造の構想またはシナリオとしての言が生まれたのである。そして男と女、雄と雌のペアシステムは愛の実現のためにつくられたのである。つまり愛の完成のために男は男らしく、女は女らしく造られたのである。愛に

は、愛が真なる愛となるための道しるべが必要であった。したがって言には「愛の道」としての法（規範）が伴っていたのである。

サラ・サリーは、バトラーに「ラディカルな構築主義者」というレッテルを貼ろうとしたが、バトラーはそれに反論していると、次のように述べている。

「ラディカルな構築主義者」とは、すべては言語であり、すべては言説である。つまり身体を含めて、すべてのものが構築されていると、単純に（そしておそらく頑固に）言い張ることだとされている。しかしバトラーは、この批判は脱構築のアプローチをはき違えたものだと主張し、脱構築は、「すべてのものは言説として構築されている」という言い方に帰着しないと述べる。脱構築するとは、主体が言説によって構築されるさいに、排除、抹消、予めの排除、棄却がどのように作用しているかを認識し、分析することである」⁽³³⁾

しかしバトラーが真に言いたいことは、言語と言説がすべてを決定しているということであろう。これはリチャード・ドーキンスが遺伝子は利己的であると主張しながらも、反論されるとメタファーであるとか、遺伝子には協力的な面もあると言って、弁解しているのと同じである。

バトラーは、ジェンダーというカテゴリーを「流動化させ、攪乱、混乱させ、増殖させることによって、ジェンダー・トラブルを起こしつづける」⁽³⁴⁾と主張した。バトラーのこのような主張は、まさにポストモダン・フェミニズムの行き着くところである。このような主張は、デリダによる言説の攪乱と軌を一にするものであり、さらにはダーウィニズムの突然変異による種の攪乱と軌を一にするものである。

統一思想の観点から言えば、神は生物を種類に従って創られたように、男と女も明確な差異をもって創られたのである。そして男と女が肉体的にも、精神的にも、ハーモニーを描きながら愛し合うとき、男も女も真の喜び（快樂）を得ることができるのである。

(ii) セジウィック批判

セジウィックによれば、男性同士、女性同士の同性愛はホモソーシャルという男性同士の友情に危険なものとみなされて、ホモソーシャル的父権制社会では排除されているというが、そうではない。同性愛は真なる異性愛から逸脱したものであるから、人間は本性的に同性愛を避けようとするのである。

セジウィックは、男同士の友情の中には、同性愛が潜在しているというが、本来、友情（兄弟姉妹の愛）と同性愛には何の関係もない。同性愛は異性間の性愛の歪んだもの、変形であるが、それにたいして友情（兄弟姉妹の愛）は性愛とは無関係なものである。

セジウィックはまた、レヴィ＝ストロースの「女性の交換」論の観点からホモソーシャルな社会を考察している。女性が歴史的に男性から虐げられてきたのは事実であるが、それは人類始祖のエバの墮落によって、女性はその罪を償わなければならなくなったからであった。しかし、今日、再臨の摂理の進行とともに、女性の贖いの歴史（蕩滅復帰の歴史）が終わり、男性と女性が同等な位置と価値を持つことができる時代になった。20世紀に入り、女性解放運動が台頭するようになったのは、そのような時代的背景があったのである。したがって、女性を交換する物と見るのは誤りである。

セジウィックはさらに、セクシュアリティは揺れ動くものであり、混沌たるものであるという。これはバトラーのジェンダー・トラブルと同様、デリダによる言説の攪乱と軌を一にするものであり、さらにはダーウィニズムの突然変異による種の攪乱と軌を一にするものである。

(5) フェミニズムを超えて、真の男女の愛へ

ポストモダン・フェミニズムの生みの親はまさにポスト構造主義であり、さらにはマルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義なのである。

すなわち現代フェミニズム（特にポストモダン・フェミニズム、およびキア理論）の根となっているのがマルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義であり、幹となっているのがポスト構造主義である。したがってマルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義が崩壊し、ポスト構造主義が崩壊すれば現代フェミニズムは崩壊せざるをえないのである。その他のフェミニズム——マルクス主義フェミニズム、ラディカル・フェミニズム、エコロジカル・フェミニズム他——についても同様である。それらは直接、ポスト構造主義と関わりないとしても、マルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義のいずれかに基づいているのであり、同様に崩壊せざるをえないのである。

フェミニズムの崩壊の後に来るのは、神の愛を中心とした、純潔にもとづいた真の男女愛、真の夫婦愛の理念である。人間は本来、個性を完成した一人の男性と、個性を完成した一人の女性が結婚するようになっている。そして統一思想から見た、本然の結婚の意義は、1)男性と女性の二性が調和している神の姿に似ること、すなわち神の顕現であり、2)宇宙万物の完成、3)人類の統一、4)家庭の完成である。ところが不倫、同性愛、近親相姦などは、そのような理想を破壊するものである。不倫、同性愛、近親相姦などの歪んだ愛のなかには、神は臨在できず、運行できない。また、万物が共鳴できないものである。聖書には、「被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けている」（ローマ人への手紙 8:22）と書かれている。日本のことわざにも、「夫婦喧嘩は犬も食わない」とある（同性愛、その他の歪んだ愛は言うまでもない）。さらには、人類を分裂せしめ、家庭を破壊するものとなるのである。フェミニズムおよびジェンダーを否定する思想はまさにそのような悲惨な結果をもたらすものである。

第4回世界女性会議（1995年、北京）において、マザー・テレサは次のようなメッセージを寄せた。

私には、なぜ男性と女性は全く同じだと主張し、男女の素晴らしい違いを否定しようとする人々がいるのか理解できません。神より授けられたものは全て善きものでありながら、全てが同じものであるとは限りません。……神は私達に「汝を愛するがごとく隣人を愛せよ」とおっしゃいました。だから、私はまず正しく自分を愛し、それからそれと同じように隣人を愛します。しかし、神が自分をお造りになったことを受け入れないとすれば、どうして自分を愛することなどできるでしょうか。男の素晴らしい違いを否定する人々は、自分たちが神によって造られた存在であることを認めようとしませんし、それゆえに隣人を愛することもできません。彼らをもたらすものは、対立と不幸と世界平和の破壊でしかありません。

真の夫婦愛による真の家庭が核となって築かれる社会、世界が、来るべき理想社会であり理想世界である。そこでは男性による女性の支配、差別、虐待はなく、女性の男性に対する反抗、反逆もない。男性と女性が真の愛のもとで、共に喜び合う世界であり、そこでは男女の真の平等が実現されるのである。

註

- (1) メアリ・エヴァンス、奥田暁子訳『現代フェミニスト思想入門』明石書店、1998年、33-34頁。
- (2) 同上、123-24頁。
- (3) ソフィア・フォカ、レベッカ・ライト、竹村和子・河野貴代美訳『ポストフェミニズム入門』作品社、2003年、99頁。
- (4) 同上、51頁。
- (5) 同上。
- (6) メアリ・エヴァンス『現代フェミニスト思想入門』35頁。
- (7) 同上、35頁。
- (8) 同上、78頁。
- (9) 同上、73頁。
- (10) 同上、74頁。
- (11) 同上、197頁。

- (12) 竹村和子『フェミニズム』岩波書店、2000年、17頁。
- (13) ソフィア・フォカ、レベッカ・ライト『ポストフェミニズム入門』64頁。
- (14) 同上、159頁。
- (15) ジュディス・バトラー、竹村和子訳『ジェンダー・トラブル』青土社、1999年、163頁。
- (16) ソフィア・フォカ、レベッカ・ライト『ポストフェミニズム入門』59-61頁。
- (17) ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』33頁。
- (18) 大越愛子『フェミニズム入門』筑摩書房、1996年、187頁。
- (19) ソフィア・フォカ、レベッカ・ライト『ポストフェミニズム入門』52-54頁。
- (20) 同上、55-57頁。
- (21) ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』58, 257頁。
- (22) 同上、73頁。
- (23) 同上、226-227頁。
- (24) 同上、28-29頁。
- (25) サラ・サリー、竹村和子訳『ジュディス・バトラー』青土社、2005年、115頁。
- (26) 同上、114頁。
- (27) 同上、225頁。
- (28) 同上、238頁。
- (29) イヴ・K・セジウィック、上原早苗・亀澤美由紀訳『男同士の絆：イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会、2001年、76頁。
- (30) 同上、244頁。
- (31) 大橋洋一「キーワード解説」、竹村和子編『ポストフェミニズム』作品社、2003年。
- (32) イヴ・コゾフスキー・セジウィック、外岡尚美訳『クローゼットの認識論』青土社、1999年、121頁。
- (33) サラ・サリー『ジュディス・バトラー』144頁。
- (34) ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』73頁。

参考文献

- エヴァンス、メアリ『現代フェミニスト思想入門』奥田暁子訳、明石書店、1998年。
 Mary Evans, *Introducing Contemporary Feminist Thought*, Polity Press, Cambridge, UK, 1997.
- ガッティング、ガリー『フーコー』井原健一郎訳、岩波書店、2007年。Gary Gutting, *FOUCAULT: A VERY SHORT INTRODUCTION*. Oxford University Press Inc., New York, 2005.

- ギャロップ、ジェーン『ラカンを読む』富山太佳夫、椎名美智、三好みゆき訳、岩波書店。2000年。Lane Gallop, *Reading Lacan*, Cornell University Press, London, 1985.
- サリー、サラ『ジュディス・バトラー』竹村和子訳、青土社、2005年。Sara Salih, *Judith Butler*, Routledge, New York, 2002.
- シム、スチュアート小泉朝子訳『デリダと歴史の終わり』小泉朝子訳、岩波書店、2006年。Stuart Sim, *DERRIDA AND THE END OF HISTORY*, Totem Books, New York, 1999.
- ジョンソン、ポール『神の探求』高橋照子訳、共同通信社、1997年。Paul Johnson, *THE QUEST FOR GOD*. The Orion Publishing Group Ltd., London, 1996.
- ストラザーン、ポール『90分でわかるフーコー』浅見省吾訳、青山出版社、2002年。Paul Strathern, *FOUCAULT IN 90 MINUTES*. Ivan R. Dee, Chicago, 2000.
- ストラザーン、ポール『90分でわかるデリダ』浅見昇吾訳、青山出版社、2002年。Paul Strathern, *DERRIDA IN 60 MINUTES*, Ivan R Dee Publisher, Chicago, 2000.
- スパーク、タムシン『フーコーとクイア理論』吉村育子訳、岩波書店、2004年。Tamsin Spargo, *FOUCAULT AND QUEER THEORY*. Totem Books, New York, 1999.
- セジウィック、イヴ・コゾフスキー『男同士の絆：イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗・亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、2001年。Eve Kosofsky Sedgwick, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. Columbia University Press, New York, 1985.
- セジウィック、イヴ・コゾフスキー『クローゼットの認識論』外岡尚美訳、青土社、1999年。Eve Kosofsky Sedgwick, *Epistemology of the Closet*. University of California Press, Berkeley, 1990.
- バトラー、ジュディス『ジェンダー・トラブル』竹村和子訳、青土社、1999年。Judith Butler, *Gender Trouble*, Routledge New York, 1990.
- フォカ、ソフィア、レベッカ・ライト『ポストフェミニズム入門』竹村和子・河野貴代美訳、作品社、2003年。Sophia Phoca and Rebecca Wright, *Introducing Post feminism*, Icon Books UK, 1999.
- ベルジー、キャサリン『ポスト構造主義』折島正司訳、岩波書店、2003年。Catherine Belsey, *POSTSTRUCTURALISM*. Oxford University Press Inc., New York, 2002.
- ホロックス、C、Z・ジェヴティック『フーコー』白石高志訳、現代書館、1998年。Chris Horrocks and Zoran Jevtic, *INTRODUCING FOUCAULT*, Totem Books, New York, 1997.
- ミルズ、サラ『ミシェル・フーコー』酒井隆史訳、青土社、2006年。Sara Mills, *MICHEL FOUCAULT*. Routledge, New York, 2003.
- ライト、エリザベス『ラカンとポストフェミニズム』椎名美智訳、岩波書店、2005年。Elizabeth Wright, *Lacan and Postfeminism*, Icon Books UK, 2000.

- ロイル、ニコラス『ジャック・デリダ』田崎英明訳、青土社、2006年。Nicholas Royle, *JACQUES DERRIDA*, Routledge, New York, 2003.
- 上利博規『デリダ』清水書院、2001年。
- 今村仁司・栗原仁『フーコー』清水書院、1999年。
- 内田隆三『ミシェル・フーコー』講談社、1990年。
- 大越愛子『フェミニズム入門』筑摩書房、1996年。
- 大城信哉著・小野功生監修『図解雑学・ポスト構造主義』ナツメ社、2006年。
- 奥田暁子、秋山洋子、支倉寿子編著『概説フェミニズム思想史』ミネルヴァ書房、2003年。
- 斎藤慶典『デリダ：なぜ「脱一構築」は正義なのか』NHK出版、2006年。
- 桜井哲夫『フーコー』講談社、2003年。
- 新宮一成『ラカンの精神分析』講談社、1995年。Shingu Kazushige, *Being Irrational*, Gakujū Shoin, Tokyo, 2004.
- 高橋哲哉『デリダ』講談社、2003年。
- 竹村和子『フェミニズム』岩波書店、2000年。
- 竹村和子編『ポストフェミニズム』作品社、2003年。
- 中山元『フーコー入門』筑摩書房、1996年。